
恋愛尚早（前）

CC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛尚早（前）

【Nコード】

N5889Q

【作者名】

CC

【あらすじ】

風邪をひいて熱を出したブラコン若葉を心配する弟・双葉。ついこの前風邪をひいていた自分が移したと責任を感じていたが、そこには思わぬ伏兵が。

カーテンを閉めたままの窓に当たる雨音が暗い目蓋の奥に沁みて、まだ深い眠りから覚めやらぬ若葉の意識を絡めてゆく。

目蓋を開いてぼんやりと見上げる壁にかけられた時計の針は起床する時間を大幅に過ぎている事を教えていたが、厚い雲に太陽が覆い隠されてしまったせいでどんよりと沈んだままの世界では、蒲団から抜け出て新しい今日一日を始める気にはなかなかなかった。ほう、と溜め息とも欠伸ともつかない息を吐いた後、重たく圧し掛かってきた目蓋を抗うことなく閉じる。

目蓋の裏にはまだ、つい先程まで見ていた夢の続きが残っている。白く光って直ぐに黒く塗り潰されたその奥に、白いマスクが浮かんでいた。

「アネキ？」

「まだ寝てるんですか」と、不意にドアの向こうで声がする。そう言えばそろそろ学校へ行く時間だと思いながら、ドア一枚を隔てた向こうから中の様子を窺うように声をかけてきた双葉に「ううん」と、短く返事をする。いざ声を出して初めて、喉がガラガラというくらいに気がついた。

「酷い声ですね」

「風邪でも引いたんですか」と、続ける双葉が少しだけドアを遠慮がちに開く。そつと覗いた眼鏡の奥から、丸い瞳が心配そうに蒲団の上にもまだ横になったままの姉の姿を捉えた。

「あれ、顔が真っ赤じゃないですか、熱もあるんじゃないですか」

そうして、ベットの上で横になったままの姉の頬が紅く燃えているのに気がつくと、双葉はドアを開いて姉の横へと歩み寄る。ベットの傍へとしゃがみ込んだ弟を見上げる姉の瞳が熱に浮かされてぼんやりと淀んでいるのを見詰め返ししながら、双葉は若葉の額に掌を置くと目を見張った。

「やっぱり。いつまでも起きてこないから可笑しいと思ったんですが、熱があるじゃないですか」

双葉の声を、若葉はどこか遠くで聞いている。一旦は見上げた弟の顔も、重たい目蓋に消されて直ぐに見えなくなってしまった。

「大丈夫ですか、ボクの風邪が移ったんですね」

何の疑いも持たずにそう言った双葉の声を聞きながら、風邪だと言われると途端に痒くなり出した喉を我慢しきれずに若葉が湿った咳をする。

「今日は学校を休んでこのまま寝てる事にするわ。双葉に移すと大変だから、向こうへ行って」

熱があるとはつきり指摘されて途端に体から力が抜けていく。

話す言葉にも力が入らずにそれだけ言って大きく溜め息をついた若葉を、双葉が心配そうに見詰めている。

「ボクが学校で風邪をもらって寝込んだ時はアネキが看病してくれたじゃないですか。だから今度はボクがアネキを看病しますよ」

「あれは週末だったし……今日は学校があるよ」

「もう母さんは仕事に出てるし、期末テストも終わってるボクが休

んで看病します」

「でも、双葉に風邪を移したら悪いから」

「アネキの風邪は、きつとその時の看病のせいでボクから移った風邪ですから、ボクから移った風邪ならボクには免疫が出来てるんで戻る事は無いですよ。子供の頃よくお父さんが言ってたじゃないですか」

閉じた目蓋の裏で弟の声を聞いている。「お父さん」という言葉と同時に目蓋の裏に浮かんだ母は、「迷信みたいなものよ。そもそも、風邪なんて誰に貰ったのかも分からないものなんだし」と、笑いながら若葉に語りかけている。

今ここに母が居たらきつとそう言うだろうと思いながら、その向こうで双葉がぶつぶつと呟いている言葉を切れ切れに拾う。

「しかしアネキが風邪をひくなんて珍しいですね。ボクの風邪は学校で移ったんだろうけど……あ、でも、先週、借りてたマンガを返しに隣の政宗先生の所へ遊びに行ったら先生も凄い咳して鼻水垂らしてたからそこで移ったのかも？あ、でも、そもそもあの人は年中具合の悪そうな顔してるから、咳や鼻水が出ててもどれが風邪でどれが違うのか、分からないな」

双葉の声を聞きながら、若葉は白いマスクをしていた政宗の顔を考えて出している。

蒲団に横になったまま、熱のせいで普段よりも更に重たく押し掛かっている目蓋を必死に押し上げて若葉を見ている政宗の顔からマスクを引っ張り上げ、

「息が苦しいんじゃない？私がマスクするから取っていいよ」

と、言って性質の悪そうな風邪の菌でいっぱいだと思しき政宗のマスクをゴミ箱に捨てて、ポケットに入れておいた持参したマスクで若葉は口と鼻を覆った。

「双葉が政宗が風邪ひいてるって言ってたから　おなか、空いてるでしょ？」

優しく語り掛ける若葉を、政宗は返事もせずにじっと見上げていた　いや。今思い返せばこの時から既に、政宗は若葉の語りかける言葉のどれ一つにもきちんと返事をしてはいなかった。

ただ黙って、今にも閉じてしまいそうな目で若葉を見上げていた。

「　政宗？聞いてる？」

と、続けて若葉は座ったまま腰を屈め、政宗の顔を覗き込んだ。

今にも溶けてしまいそうに潤んだ政宗の目が、熱の高さを物語っている。もしかしたら若葉の声は耳に届いていない所か、若葉が顔を近づけて己の顔を覗き込んでいることさえ認識できていないかもしれない、と若葉は思った。

「大丈夫？」

そう呼びかけて、玉の汗を滲ませた政宗の額に手を伸ばす。

もう少して触れるところまで近づいただけで、掌に薄っすらと熱を感じる。彼の熱は相当高そうだと思った若葉が一瞬手を止めると、ガラガラの喉から振り絞るように政宗が呻いた。

が、小さく呻いただけで何を言ったのかは全く分からなかった。首を傾げて何も聞えなかったとアピールしてみたが、政宗が再び唇を開く事はなかった。

「　でもアレね、普段の生活が弛んでるからすぐ体調を崩すわけだし、不摂生を続けてるから風邪の菌さえ跳ね返すことが出来ないのよ、政宗は」

出した手を引っ込めて、弱っている政宗を見下ろしながら若葉が言う。政宗が何も言わずに自分をじっと見上げている居心地の悪さに、何かを言わなければと思って焦って話題を探したが、いつの間

にか政宗の粗探しになっていた。

「大体がお酒の呑みすぎなんじゃない？二日酔いで頭が痛いのかお腹をいつも壊してるのとか、全部お酒が原因じゃない。午前中の授業でいつも眠そうにしてるのも遅くまでお酒を呑んでるからでしょう？もう、いい加減なんで体調が優れないのか気付いて生活を改めてもいいんじゃない、いい大人なんだから」

弱っている相手に言う話ではないなと気付いた若葉が、いつの間にか小言になってしまった話を終えて口を結ぶ。政宗を怒らせたかと思いつながらじつと反応を窺っている先で、政宗はふう、と小さく息を吐くと口を開いた。

「……さっきから何しゃべってるのか全然わかんねえんだけど」

低く言って、政宗が若葉の顔に手を伸ばす。

「これ、マスク……もそもそもぞしてて何言ってるのか聞えねーんだよ」

告げて、政宗は指で若葉のマスクを引っ掛けると、そのままぐいっと引っ張った。

「で、なに？熱のせいで耳が遠いんだわ、もっと近くで言ってくんね？」

ぴしっと伸びたゴムに引っ張られてマスクが若葉の顔から外されると、政宗が苦しそうな声で言う。

もう、仕方が無いわね、と若葉は思い、病人は我俣なものだと世間一般に言われる言葉を思い出しながら政宗の耳に顔を寄せた。

「双葉も寝込んでタマゴ粥作ったんだけど、食べますか？」

小言を繰り返そうかと思ったが、病人相手に大人気ないと若葉は思い直し、近くから顔を覗き込んで言うと、熱のせいで濁った白目の奥から政宗がじつと若葉を見詰め返している。

が、相変らず聞えていないのか、全く返事をしないでいる政宗に、若葉はもう少しだけ顔を寄せると、もう一度言った。

「おなかは」

空いていませんか、と言いかけたところで、若葉は政宗の唇が動いている事に気がついた。声が聞こえないから返事をしていなかったと思ったが、声が聞こえないだけで政宗は返事をしていたのだ。そう気付いて若葉は更に身を屈め、もぞもぞと動いている政宗の唇にそつと耳を寄せた。

薄っすらと髭のようなものが若葉の目の前にあった。政宗の唇はその上にあり、その唇が動いて何かを話すのを若葉は目を凝らして待っている。

しかし、いくら待っても動かない唇に、若葉は目だけで政宗の瞳を振り返る。

己の唇に近づいた若葉を見下ろす政宗の目蓋は殆ど下されて今にも閉じてしまいそうだった。

が、薄く開かれた瞳から真っ直ぐに若葉を見詰めている。

目が合つて、「なに」と、若葉は心の中で尋ねる。

政宗の返事は無い。

代わりに、ゆっくりと引き寄せられるように互いの顔が近づいて、何を思う間も無く唇同士が触れる

慌てて身を起こそうとした若葉の身体は動かない。いつの間にか背中に回されていた政宗の腕が、若葉を己の胸に閉じ込めている。その手がゆっくりと背中から若葉の頭に伸びて胸の中に引き寄せた。

紫色の紙袋に包まれた鍋を抱えた政宗が、傘を畳んで足元へ転がすと和泉家のインターホンを鳴らす。

結局姉の若葉に大丈夫だと説得されて学校へ向かった双葉と入れ違いに、空き時間に外出許可を取った政宗が若葉を訪れた。

「政宗？」

赤く上気した顔をドアから覗かせた若葉がコホコホと乾いた咳をする。相手が政宗だと確認してから、若葉は口元をマスクで覆った。「大丈夫か？」

「うん、まあ、一応は。って言うか、授業は？」

「ああ、今は空き時間。病院へ行ってくるって出てきた」

「もう行つて来たの？」

「いや、行かない」

「なら今から行くの？」

「いや。これを返しに來ただけだから」

言いながら政宗は紙袋を広げて中身を若葉に示した。

「ああ、それならいつでもいいのに」と。若葉は中身を覗きながら返事をした。

あの、不意打ちのようなキスのあと。

流れを止めてしまった時間を押し出すように動かしたのは若葉だった。

突然のキスを無かったことにでもするかのように、若葉は直前までしていた話しに戻って再びタマゴ粥を食べないかと政宗に尋ね、返事も聞かずにそそくさと立ち上がると狭いキッチンへ向かったのだった。

「『ボクの風邪がアネキに移ってしまつて』って、双葉が心配してたぞ」

玄関の中に入り、政宗が紙袋を置きながら、言う。

若葉は框に正座をすると、目の前に立つ政宗を見上げた。

「まああの、双葉はそう思つてゐただけど、風邪なんて目に見えるものじゃ無いから誰から貰つたかなんて分からないし」

少しだけ早口で言つた若葉が、政宗から少しだけ顔を背ける。

「学校で風邪が流行つてゐるし。どこで誰から移つたのかなんて分かるものじゃないわ」

言いながら若葉は顔を俯かせ、政宗の顔を窺う様に目だけで振り返る。慣れないのか、顔にかけたマスクを引っ張ったり押したりして指先で弄んでいる。

「折角政宗の風邪が治つたのに移したら悪いわ」

「だからもう、帰つた方が」と、言いかけた若葉の言葉を遮るように政宗が口を開く。

「まあそつだよな。一回のクシャミでばらまかれる風邪のウィルスは何十万個つて言うらしいし、しかも暫く留まつてゐるらしいからどこで誰から移つたのかなんて分かるわけねえよな。でもよ？一回のくしゃみで飛ぶほんのちよつとの飛沫でそれなんだから　キスしたら移らないほうが可笑しいと思わね？」

”キス”という言葉に若葉の心臓が大きく跳ね上がる。混乱する頭で、あの日、咄嗟にタマゴ粥の話に戻してキスを誤魔化してしまつたが、有耶無耶になつたと思つていたキスの話を政宗が持ち出した意図を必死に探ろうとした。

肩にそつと政宗の手が置かれ、慌てた若葉が少しだけ、腰を浮かせて逃げるように身を引く。

政宗はゆつくりと、驚いたように目を見開いている若葉の顔を覆うマスクに手を伸ばすと、指を端に引っ掛けた。

「ダメ、だから絶対移る、マスクを取ったら政宗に風邪が移るから」
言いながら政宗の手を握り、若葉がマスクを死守しようとする。

が、政宗のもう一方の手でその若葉の手を上から握ると、そのまま己の胸に引き寄せた。

「マスクしてたって100%防げるわけじゃねーだろ。それにお前の風邪はオレの風邪なんだから、双葉の節が正しいならオレには戻らねえ」

だからアレは迷信みたいなもので、と若葉は思ったが言葉にはならない。

雨の中を歩いてきた政宗の唇はひんやりと冷たく、若葉の熱をゆつくりと吸いとっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5889q/>

恋愛尚早（前）

2011年2月4日20時26分発行